
白騎士物語～零夢～

ホクタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白騎士物語〜零夢〜

【Nコード】

N7081Y

【作者名】

ホクタ

【あらすじ】

かつての戦争から十年が経った・・・人々は過去の戦争は頭から離れつつあったがそれを新たな脅威が襲う。

それに立ち向かうは、新たな騎士！

シンナイトは既に封印されたが新たな騎士が青年を呼び覚ました。再び古く錆びた歯車が動き出した・・・。

夢ノ巻

10年後のバランドール。

シズナが姫になってからのバランドール王国はとっても活気付いてきた。

かつての英雄たちは伝説となって語り継がれていった……。

その中の1人でもあるエルドアという老剣士はかつての戦争をのちに姿を消してしまった。

もうひとりのカーラという者も旅をするために現在は世界中を歩き回っている。

この戦争の英雄の中の英雄であるレナードは現在兵士をやっているが、時々バランドール王国にあるラパッチワイン商にも顔を出して働いている。

こうして、かつての英雄たちはほとんど姿も見せずに時は経っていた。

「さあ、爺っちゃんから頼まれた素材を取りに行くか」

腰に差してある古びた剣を丁寧に抜き出しながら平原へ歩いて行く青年がいた。

「これはどうも、アルト様……狩りですかね？」

本を二冊持った老人が青年に話しかけながら一冊の本を青年へ渡した。

「へ？この本は？」

「この本は剣術の基礎的な技などが書かれておりますぞ」

と言って腰のポーチからは青色のドリンクを渡しながら笑った。

「爺さんこんなもんいらねーよお。俺は独学、独学だぜ？」

「独学だとしても強い兵士にはなれぬぞ？」

青年は老人の言葉に対して苦笑しながら本とドリンクを受け取った。

「さんきゅー」

老人はニツコリ笑いながら再び本を開け読みながら歩いていったのだった。

青年は大きな門を兵士に許可を得て王国から出て平原へ向かっていった。

平原はかつての戦争の傷跡が生々しく残っており岩盤が削れてたり地面が大きくえぐれてたりなどしていた。

「イシュレニア軍、残党はまだ何をしでかすか分からないからなあ・・・」

そう青年は言いながら老人から貰った本を読みながら平原へと向かった。

バランドールとの貿易が多いフォーリア公国とはもちろん仲がよく時には共に戦ったりなどもある国なのだ。

そのフォーリア公国の姫であるミウも同じくかつての戦争でバランドールとの同盟軍として参加していた。

「ユウリ様、バランドール国付近にイシュレニアの残党と思われる集団が」

「本当ですか？ならば兵を挙げてください」

「了解しました」

そういうと兵士はさっさと王宮を出た。

王宮外にも兵士が数人いて、兵士の肩に1匹のフクロウが肩に乗っていた。

「ここに居る者よ！聞けえ。今からイシュレニア残党の排除を命じられた」

その呼びかけと共にぞくぞくと兵が伝令兵の元に集まってきた。

「数は？」

「ざっと四十ぐらいだそうだ。ピグロの映像だとそのぐらいはいたすると、ピグロと呼ばれるフクロウはサツと飛びだって行った。

「よし！分かった。この王国には手を触れさせないようにするぞ」

『おっ！』

さわやかな空気が青年の顔を撫でた。
草を踏む音雪を踏むような音がして、一瞬雪の上を歩いているように思えた。

「そろそろ・・・来てくれるかな」

そう言いながら青年は本を読みながら剣術を学んでいた。

ガサツツ

ふと、背後から物音が聞こえた。

「きた！」

青年は本をパツと閉じて腰に差してある古びた剣を抜き出した。

『ポル~~~~』

すると、背後から急に小さな生き物が青年の背中を思いつきり何かで殴った。

「いでえ！てか、いきなりかつ」

青年は一步、二歩よろめきながらも振り返って剣を敵に向けた。

「へっ！そんな木でできた斧で来るってか？」

『ポル！ポル~~~~』

青年は小さな木の斧を持った仮面を付けた妖精に向かって剣を振り回した。

ビュツ　　ザツ　　シュツ

妖精は驚くスピードで剣を避けていき木の斧で古い剣を受け止めた。
「なっ・・・この妖精普通じゃねえ」

妖精はスツと背後に回り青年の右足を木の斧で右足を叩き飛びついた。

青年はあっという間に倒され妖精の持つ木の斧で顔面を叩かれながらもなんとか両手で押さえた。

「ちくしょう・・・この妖精、片目が変色してる・・・まさか！」

青年はなんとか妖精を振り払い剣を手にした。

妖精の片目が赤く変色しており頭の帽子にはなにかの装置が取り付けられていた。

「いや、俺気づくの遅かったな。この装置……」
そう言いながら青年は剣に魔力を注ぎ込んだ。
すると、剣にはわずかな炎が放った。

『ポル、ポルッ』

妖精は、大きく斧を振り回しながらこちらへ走り出した。

「火炎斬りいい！」

わずかな火炎を纏った剣がキレイに妖精の腹部を切り裂いた。

『ポ……ポル』

青年は一息付いて気絶した妖精に歩み寄って帽子に付いた装置を剣で切り裂いた。

「よつと……残党も残党でこんな装置作りやがって！」

装置は煙を出しながら小さく爆発した。

夢ノ貳

イシュレニア残党はだんだんとバランドール王国へと迫ってきていた。

「レナード様！一体なにを・・・イシュレニアが来ます」

「大丈夫ですよ。俺1人で行けますから」

その男は三十代前半の男で両方の腰には銀と金の剣を差している。

「レナード様、しかし数が数ですぞ」

レナードは両隣にいる兵士に、コアを渡した。

「これ、相手がギガースで来たたらお前たちで対抗してくれ」

「了解しました。レナード様」

「じゃあ、残りの兵士は王国に戻っていてくれ」

すると、レナードと二人の兵士は平原を走り出した。

ただ、残された兵士たちは首を傾げて王国へ戻っていった。

「三人だけで立ち向かおうだなんて・・・」

青年アルトは剣を腰に戻して再び歩き出した。

「それにしても・・・こんなところまでイシュレニアは俺らを攻め立ててきてるのか・・・」

すると、前方に人影が見えた。

「イ、イシュレニアだ」

アルトはすつと木の背後に回って隠れた。

（奴らがこんな平原まで来てたなんて、バランドールは知ってるのか？）

アルトはすつと木の陰からイシュレニアの残党を見守っていた。

「レナード様。イシュレニアの残党が見えます」

「ああ、案外数があるな」

イシュレニアの団体はバランドール王国へと続く道を歩いて行った。

「どうします?」

「そりゃ、行くしかないでしょ」

そういうとレナードは片方の剣を取り出し駆け出した。

すると、その姿を見たアルトはつい、駆け出しそうになったのだが木の幹につまづいてしまった。

「おい、なにかいるぞ!」

イシュレニアの一人がアルトの姿に気づき後ろを振り返った。

(や、やべえ・・・)

すると、横から一人の男が向かってきた。

「イシュレニアアア!」

イシュレニアたちはいきなりの出現に戸惑いながらも武器を手にした。

そして、一気に男の方へと走り出して行った。

「やっちまえ。バルンドールの兵士だ」

静かな草原に大きな足音が地面に響く。

キンツ ガシュツ

すると後方から再び足音が聞こえてきた。

「レナード様!」

「おお、すまねえ」

イシュレニアの団体は片手剣や両手持ちの大きな剣を持った兵士たちがレナードに襲い掛かった。

ギンツ キン シュバツ

「うぐあ・・・」

レナードの持つ銀の光を放つ剣は次々と兵士を叩き斬っていく。

「おらぁー」

シュバ シュツ

仲間の二人も同じく銀の剣でイシュレニアの団体を次々と減らしていった。

「ええい!バルンドールの兵士が。魔法・・・フレイムランス」

イシュレニアの兵士が唱えると、杖の先から赤い火玉ができ、それ

が短い槍状になった。

それをレナードへ向けて放った。

キンツキンツ シュバツシュ シュイツン

赤い槍はレナードへと向かっていた。

それに気づいた仲間が叫んだが耳には入らなかった。

「レナード様！」

兵士を倒したその瞬間、目の前に赤い槍が迫ってくるのが見えた。

ふと、レナードの前に人影が通った……。

「まずっ……」

キーーン

耳をつんざく音と共に炎が散り、平原を黙らせた。

「うぐっ……」

サビの入った古い剣は赤くなり、それを持っている青年は息苦しいように見えた。

「いきなり……登場です」

「青年がなんでこんなところに」

魔法を受け止めた反動で青年はしりもちを付いたが、再び立ち上がって挨拶した。

「俺、アルトって言います」

レナードは驚いた顔だったがニツコリ笑った。

「よろしく、アルト」

そういうと、二人は目つきを変え静かな平原に再び金属音を走らせた。

いくら古びた剣でも一応まとりな剣とは対等だが相手が相手でかなりの戦闘力を誇っていた。

「こ、こいつ」

アルトは一瞬について兵士の横腹を短く斬ると、切り返して再び反対の腹部を斬った。

「こ、この小僧！」

「小僧じゃねーよ。ちゃんとした青年だぁー！」

アルトは剣に魔力を注いで剣を火で纏った。

「火炎．．．斬りイイ」

空中で半回転してその勢いで兵士の胸の辺りを切り裂き兵士を吹き飛ばした。

アルトは綺麗に着地し、にやりと笑った。

「やるねー、アルト」

レナードはそう言って剣の先を相手へ向けて笑った。

夢ノ参

穏やかな風が肌を撫でるも、その心地良い風は金属音が走る草原には全く伝わらなかった。

「アルト、大丈夫か？」

「あ、はい！」

不意に敵の兵士がアルトの背後に回りこみアルトの首を絞めた。

「うう・・・ちくしょう」

レナードはすぐ気づきアルトへ向かうがレナードの背後からは炎の玉がレナードへ放たれていた。

ボンッボンボオオ

「う・・・背中があちい」

レナードもそれに対抗し、魔法と唱えた。

「ウインドカッター！」

レナードが解き放った魔法は風がブーメラン状の形になりそれを一気に解き放った。

風はとてつもなく速い力で相手の兵士を空中に舞い上げたかと思うとそのまま2メートル程一気に飛ばした。

「レナード様！ 奴らアドベントを・・・」

「ちっ・・・お前らはあの青年を頼んだ」

『了解しました』

そう言い放つとレナードは腰に付けてある何かのコアを取り出した。相手のイシュレニアの勢力もかなり無くなりこちらが有利となっていた最中、相手がアドベントを唱えた。

「ふはは・・・アドベント」

そして、あるカードの様なモノを額に当てたかと思うと急に兵士に取り付く紫のオーラが体を包み、次第に大きなモンスターと化した。

『グガアアア！』

右手には紫色のオーラを放つ魔剣を持ち、レナードを鋭い目で睨み

た。

しかし、騎士の速さは魔獣を上回りスツと後ろに避けたかと思えば、一気に前に詰めて魔獣の腹部を思いつき殴り飛ばした。

魔獣は一二歩でなんとか受け止めたが膝を付いて騎士を睨みつけた。

『グガアアアー。コヤツコロス』

魔獣は体中に魔力を走らせ、立ち上がり剣を騎士へ突き出したが騎士はそれも余裕に避けた。

そして、騎士の片目が赤色に変色したかと思うと一気に魔力を放出した。

『これでケリをつけてやる。来い！魔紅剣！』

レナードはそう叫ぶと騎士の目の前に魔方陣が出現し紅の光を放ちながら、赤く輝く剣が魔方陣から徐々に姿を現した。

それを手に取ると魔方陣は静かに消え、紅の光を放つ剣を構えた。

『グウウウ・・・ソナモノクダイテクレル！』

魔獣は魔紅剣を手にした騎士に迫った。

「ふんっ！」

レナードは剣を振り回したかと思うと大きくジャンプしたかと思うと魔獣の剣と

魔紅剣が激しくぶつかり合い、鏝迫り合いになった。

『ウ・・・グググ』

「うっ・・・やっぱりやるな」

「でも！」

レナードは鏝迫り合いになりながらも右足で魔獣を蹴り、剣を突き出した。

グシューウシュカッ

『ウグググウウウ・・・キサマアア！』

魔紅剣は奥深くまで魔獣を貫通し、斬り口から徐々に紅の炎が魔獣を苦しめていった。

レナードは素早く剣を引き抜き少し下がって魔獣を見守った。

「はぁ・・・はぁ・・・」

(正直、魔紅剣を出したせいでもかなり魔力が減っちゃったな)
騎士は片膝をついて変身を解いた。

『ウガァー！ヨクモナカマヲ！』

「モンスターになっても心はまだ侵食されていないようだな」
兵士はコアに力を注いで唱えた。

「変・・・身！」

再び平原に一瞬光が走ったかと思うと青と赤が混じった様な騎士が姿を現した。

その光景を見ながらレナードはアルトの方へ向かった。

「アルトは？」

「レナード様、この青年はなんとか無事のようにです」
アルトは気絶はしていたが、たいした傷は無かった。

魔獣は斧を大きく振りかぶり、ズツと騎士に向けて振った。

騎士はスツ避けて横腹に蹴り、スツとしゃがんで足を蹴り倒した。

『グググウウ・・・』

魔獣の手からは斧が離れた。

その隙をついて騎士は魔獣の上にまたがり早いスピードでどんどん殴り攻めてた。

「終わりだ」

ポロポロに殴られた魔獣から少し離れると騎士は両手に魔力を溜めた。

徐々に青い閃光になりそれを立ち上がろうとする魔獣の顔面を掴み青い閃光で爆発させた。

『ギャグググッグウウウ』

魔獣は黒くドロドロと溶け、その次の瞬間黒い煙となって消えた。
兵士は変身を解除して、若干よろけながらもレナードの元へやってきた。

「やりましたね」

「ああ、最後のはかなり良い技だったな」

兵士は頭を掻きながら照れくさく笑うとコアをレナードへ返した。

「いいよ、これはお前のもんだ。大切に扱ってくれよ」

「ええ！？いいんですか？」

さっきまでの戦いとは裏腹に場はとても和やかな空気が漂っていた。

「うっうっ……」

すると、アルトが気づいてこちらへ歩み寄ってきた。

「すみません……俺。敵に捕まって……」

「いいよ、それより体調はどうだ？」

「普通です。それよりもよく3人でこんなにも」

「いいや、4人だ。お前も参加してくれたんだし」

アルトは自らの剣を探して拾うと腰に差した。

そして、一行はバランドール王国へと帰還していった。

夢ノ四

王国に帰った一行は一息ついて、宮殿へと向かった。

「そういえば、アルトは宮殿なんて入ったこと無かったよな？」

「はい、そりゃ兵士でもなんでもないんですし・・・」

アルトは苦笑いしながら宮殿へ向かった。

王宮に入るとかなりの数の兵士たちがレナードの帰りを待っていた。大きな扉を開け、一行は入った。

『おお、レナード様！排除ありがとうございます』

「なんだかねで、数多くて苦戦したけどなあ」

レナードや兵士たちの鎧は所々ひび割れ、砕けたりしているのが見て分かるほどだった。

「やはり、もつと兵が必要でしたね」

白ヒゲを生やした老剣士がレナードに皮肉を込めて言った。

老剣士はそう言って後ろへ下がった。

「すまねえな。勝手な判断で」

レナードは一言謝ると階段に登ってシズナの座る玉座まで来た。

全員は、片膝をついて頭を下げた。

それを見てアルトもマネをして片膝をついた。

「レナード。よく排除してくれました」

「いいえ、全員倒してきました。しかし、ギガースを使う者も居た様でかなり苦戦しましたが」

「なんと。ギガースですか？アークナイトは使用しましたか？」

「はい、私の隣にいる兵士と私で使用しました」

すると、隣にいる兵士はユウリを見て、再び頭を下げた。

シズナは少し口を歪めると暖かい眼差しでアルトを見た。

「レナードそちらの青年は？どなたです？」

アルトはいきなり自分の存在を指摘されビクツと震えた。

「ああ、申し遅れました。こちらの青年はアルトと言う者で共に戦

闘に参加してくれました」

アルトはそつと立ってお辞儀をしながら言った。

「アルトです。赤い屋根の家で宿のお手伝いをしています」

ユウリはニッコリと笑って会釈した。

「こちらこそ、今回はありがとうございました」

アルトは若干照れながらも再び片膝をついた。

「まずは、その傷を癒さなければなりませんね。王宮のその休憩室にゆつたりとしていてください」

レナードたちは立ち上がってお辞儀をすると休憩室へと案内された。

俺は魔力を異常に消費したのとなんだかあの戦闘に参加した興奮を抑えられなかったがなんとかベットに横になった。

「はあ〜」

俺はため息を吐き、今までの戦闘を振り返ってみた。

初めてのあの戦闘。

しかも、実践でかなりの数だったしかも相手の放った魔法を何とか受け止めた。

自分が何故あその場面で飛び出してレナード様を守ったのが信じられない。

意識的に助けようではなく、なぜか体が動いて古い剣一本で受け止めていた。

途中で相手に首を絞められてからは気絶してしまったもののレナード様たちが戦っているのをなんだが感じていた気がする。

「アルト」

不意に誰かに名前を呼ばれたのでびっくりした。

「今日は、本当にありがとうがとうな前魔法を受け止めるなんてすげえよ」

二人の兵士も鎧を脱ぎながら頷いていた。

レナードは何かの生き物でできた硬い鎧を脱いで汗を拭った。

「いえいえ、なんか体が勝手に動いた感じで気づいたらそこに立つ

て構えてたと言うか・・・」

本当にどう説明すれば良いのか分からないが、今はそう説明するしかない。

「あはは〜。アルト凄い勇気だよ借りができたね」

レナードはごそごそとポケットから一枚の紙を取り出してアルトに渡した。

そして、レナードはベットのの上に座った。

「これ・・・なんですか？」

「これは、クエストペーパーだよ」

右上には大きくと書かれており、真ん中には文字が色々書いてある。

「依頼・・・『ワイルドボア』の討伐により狼の牙を3つ入手して欲しい・・・」

「そう、あるお店からの依頼だね〜。冒険者はほとんどこういうクエストを成し遂げるのが役目なんだよ」

「冒険者・・・ですか？でもレナード様たちは兵士でしょう？」

レナードはアルトの肩の上に手をポンと置いて微笑んだ。

「いいや、僕は兵士だけじゃないよちゃんと冒険者としてもやってるんだ」

レナードは後ろに束ねている髪の毛のゴムを取った。

レナードの髪の毛は束ねている程長いのだが、ゴムを取るともっと長いように思えた。

しかし、長い髪の毛の先の辺りが若干赤く染まっていた。

「冒険者の成し遂げたクエストはクエスト依頼者から報酬が貰えるんだ。ベルだったり防具だったりアイテムだったり」

依頼者によってさまざまな報酬って事か・・・。

既に、二人の兵士はいびきをかきながら寝ていた。

「さあ、今日はもう夜も遅い。親にはもう連絡が渡っているはずだから心配しないでここで寝るといいよ」

「あっ、これはどうするんですか？」

アルトはクエストペーパーをレナードに返そうとしたが拒否られた。
「明日、一緒にそのクエストを受けるんだよ」

その言葉に俺は一瞬ジョークかと思ったがレナードの眼差しはなんだか希望を持つ目をしていた。

「あ、分かりました」

そう言っただけ俺は無くさないように剣術の本とドリンクの入っているポーチの中にクエストペーパーを入れた。

レナードは鎧と剣二本を持って部屋を出ようとした。

「おやすみなさいです」

レナードは開ける前にこちらを見てニツコリと笑って言い返した。

「おやすみ」

その微笑みは僕の体を癒すかのように優しく、遅しかった。

僕はそのままベットに入って眠りについた。

夢ノ伍

翌朝。

なんだか、目が覚めた俺は目を擦って時計を見た。

時計の時刻は朝の4時35分を差していた。

「う・・・ん朝早いなあ・・・」

そう言いながらも体を起こして隣にいる兵士さん二人を確認してみたが、二人の兵士はまだ気持ちよさそうにぐっすりと寝ていた。

俺は始めての宮殿内にちよつと興奮してしまい、休憩室の扉をそつと開けて外を見た。

昨日シズナ姫が座っていた玉座がなんだか寂しく置いてある感じがするが人気は全く感じない。

「チャーンス」

俺は休憩室を出て王宮内をちよつと探検してみる事にした。

特に用心棒の様な兵士も居なく、奇妙な程静かでつい身震いしてしまった。

そういえば昨日、レナードは休憩室を出たけれどどこで休んでいるのだろう・・・。

そう思った俺は、階段を降りようとした瞬間！

「うわっ・・・兵士いたっ」

俺は慌てて階段から離れて兵士をしばらく観察した。

兵士は結構図体が大きくなんだか落ち着かない感じで左右に歩いている。

特に武器は持っていないようで、なんだか首をこっくりしては、眠そつだ。

俺はその場から離れ、とりあえず休憩室へと戻った。

その帰り際に初めて分かったのだが、玉座の後ろの少し上の所のステンドグラスに目がついた。

そのステンドグラスは色鮮やかなでとっても大きな絵が描かれてい

る。

左に大きくカツコイイ剣の絵で、その隣には銀色のマントを付けた騎士の絵が描かれてあった。

「まさか・・・これ」

噂にはなっていたが、今のレナードが10年前のあの戦争の時にこの様な騎士になったという。

俺はずっとそのステンドグラスの絵に目が釘付けになってしまっていたのだろう気づけば徐々にステンドグラスに優しい光が差ししてきた。

「あつ・・・まずい」

俺は急いで休憩室へ帰った。

二度寝はなかなかしないもので先ほどの夢だったのかと思うぐらいつと寝ていたのだろう。

二人の兵士たちはなんだかシンプルな生地の洋服を着ていてかなりの新品に見える。

「おっくアルト君おはよう」

一人の兵士が起きたのを気づいて挨拶してきた。

「あつ・・・おはよう御座います」

俺は軽く頭を下げながら立ち上がった。

「そついえば、昨日から俺たちの名前教えて無かったよな？」

確かに・・・。ずっと戦っていたりはしたが実際俺は向こうの二人の名前は知らなかった。

「あ、確かに・・・」

「俺はベリロつてんだ。簡単にベリーだったりベリとでも呼んでくれ」

「あ、分かりました。ベリーさん」

ベリロと言う男はレナードよりも若干年上の30代後半と見られ、髪の毛は黒髪に鼻に何かに切られたような切り傷が残っている。

「俺はヴァイス。よろしくっ」

こちらの人はヴァイスと言うものでレナードよりかは若い20代くらいだと思う。

髪の毛は茶色と濃い緑色をした感じで、結構接しやすい感じた。自己紹介も終わったところで俺たちは休憩室を出た。

「おはよう。みんな」

部屋を出ると既にレナードがニッコリと笑いながら挨拶してきた。

『おはよう御座います』

俺たちは一斉に挨拶してレナードへ歩み寄った。

レナードは手にしていた金の剣を腰に差すと話し出した。

「今日は、お前ら二人はフリーだ。依頼でもなんでもこなしておいてくれ」

『はい！』

すると、ベリーとヴァイスは顔を見合ってから走り出した。

残るは俺だけとなって、昨日のクエストペーパー（依頼紙）を差し出した。

「アルトせんきゅー。キレイに保管してたな」

笑いながら受け取ったレナードはクエストペーパー（依頼紙）を開いて行き先を確認すると、スタスタと歩き始めた。

「あつ・・・ちよっ」

俺は急いでレナードへ走って王宮を出た。

その際にレナードから受け取った新品の薄い服を着ておいた。

この服はベリロやヴァイスも着用していたのと全く同じの物だ。

王宮を出ると朝から太陽の光がアルトの顔を照らして挨拶をした。

アルトは思わず手で太陽を隠してしまったが、視点をすぐ変え、歩き出した。

じゃあ、行こうか。とレナードに促されてアルトも歩き出した。

そういえば、親には連絡が入ってあるって昨日は言っていたが今日レナードと共にクエストを受けるのは知らないはずだ。

「あ、あの。レナード様」

「レナードでいいよ、それとどうしたんだい？」

レナードは振り返ってアルトの顔を覗くように聞いた。

「レナー・・・レナードさん。今日の事親に言っただけ、心配すると思うんですけど」

「それなら大丈夫だよ。今朝ピグロに俺から伝えておいたよ」

ピグロというのは、外見はフクロウで主に目で見たものや聞いたものを自らの目で映像化することができ、冒険者の間でも使われている伝達フクロウ。

「あ・・・それなら心配ないです」

アルトはそれだけを言うと再び歩き始めた。

それに合わせてレナードも微笑んでから歩き出した。

今の時刻は、おおよそ9時半頃で人々も家からぞくぞくと出てきて商売の準備などを始めていた。

王国を出るための南の大門に着くと門番にコソコソ話し、兵士はニツコリと笑いながら門を開けてくれた。

俺も昨日の修行のために許可を出したが、門番とあそこまで仲が良いとなんだか憧れる。

レナードに続いてアルトも王国を出た。

ブラスタ平原に行くと、昨日の戦闘が頭の中を巡っている様に感じられた。

あの生身で感じた緊張感と、あの心を打つような衝撃が今でも忘れられない。

「やっぱし、最近の平原はモンスターも静かだからな」

レナードはそう呟いては、木の幹へ向かって歩いてなにやら拾っている。

「レナードさん？木の枝なんて拾ってどうするんですか？」

「これ？アルトは知らないだろうけどこういう自然の物も素材として扱われているよ」

「ええ！？そんな木の枝が素材になったりするんですね・・・」
そう言つて俺はまじまじと木の枝を見てみた。

本当、普通の木の枝で特別何かを秘めてる事もなく、なんだか笑つてしまいそうになった。

「ほい、これ持っておいてね」

レナードは木の枝を5本程拾つて俺にひょいっと渡した。

「あ、はい」

俺は渋々その木を軽蔑する目で見てから持つてきていたポーチにしまいこんだ。

二人はのんびりと平原を歩いては、花についてる七色の虫を拾つては俺に渡し、歩いて行つた。

俺は内心腹を立てながら、雑用にしか思えないこの役で今ここにいるのが笑えた。

しかし、レナードはちつとも気にも留めずスタスタと歩き、周りを見ていた。

今日のクエスト（依頼）はワイルドボアの牙の入手であるが、ちつともそのようなモンスターの気配すら無かつた。

ここのブラスタ平原は意外と広く、奥に行けばパーモ村という村に続く平原でもあるそうだ。

ふと、レナードの足が止まつた。

「レナードさん？」

急に止まつたので何かを察したのかと思ひ、俺も表情が硬くなる。

レナードの左手は右に差してある昨日使用した、銀の剣の上に手を置いていた。

「アルト、剣を構えろ」

レナードの口調が強めに言われたので、俺は慌てて腰から剣を抜いた。

小さな風の音だけが二人を包んでいた・・・。

『ガールル・・・』

すると背後から生き物の声が聞こえた。

「うわっ」

俺は驚いて後ずさりした。

しかし、気づけばレナードとアルトの周囲には数匹の赤い毛の猪のようなモンスターが取り囲んでいた。

「アルト、昨日の戦闘を思い出せ？実践ってやつだ」

そう言い捨てるレナードは一目散にモンスターの方へと走り出した。

「えっ……。分かりましたっ」

俺もそれにつられて一気に前方のモンスターへと走って剣を構えた。

「であああー」

俺はスツと剣を振ったが敵は簡単に避け、こちらを鋭い目で睨みつけた。

『ガルルルウ……。』

モンスターの口からはなつとりと糸を引いたよだれが零れている。

「腹、空かしてるって事ね」

俺はそう解釈すると、再びモンスターを斬りつけた。

シュツ

剣は軽くモンスターの皮膚を切ったが、軽傷だった。

「おしいっ」

『ガルツ！』

モンスターはいきなりアルトの前方に飛び込んだ。

「うわああ」

俺はとつさに剣を前に突き出した。

ザシュツと何かを突き刺した感覚だったが俺はモンスターに飛びつかれたせいで倒れていた。

「いで……。えっ！」

俺は目を開けると反射的に剣を突き出していたおかげでモンスターの心臓に突き刺さり相手は即死した。

俺は上に乗っかっているモンスターをどけて、剣を抜いた。

剣には生々しい血がこびり付いてなんだか気分が悪かったが・・・。
「さあ、二匹目！」
俺は吠えるモンスターへと突進した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7081y/>

白騎士物語～零夢～

2011年11月21日22時43分発行